

りである。「仙台の市街及び土木建築」（小倉強、「仙台市史」第3巻の内）に『……小路という町名がある。これは必ずしも細い道路という意味でないことは、江戸では上野広小路、仙台では大名小路（片平丁）清水小路などの幅広い道路の例でもわかる。一説では市街のはずれの路をいうとて大名小路、元寺小路（創設当時の町はずれ）の例をあげているが、表小路、狐小路、桜小路などは其例にあてはまらない。小路は侍丁に限って呼ばれ横町をいう呼称ではないかと思う。』とある。また片平丁は、もと横丁ともいい、大広丁とも呼ばれたことから、小路は道幅とは関係なく、侍丁の横丁であったと断定できる。

注(3) 剣道の達人、諱は永吉、左馬助と称し、編也斎と号した。「伊達世臣家譜」巻9、召出部に『……永吉者信州浪士一為常州鹿島人……義山公時……賜禄三百石為召出家……』とある。14才頃既に剣名が知られ、武蔵赤山で願立流という一派を立てていたが、寛永20年〔1643〕伊達忠宗が3百石〔「仙台郷土史夜話」（三原良吉）に『知行千石……』と記す。〕をもって彼を招き、世子光宗〔19才で若死〕の師とした。その後ここに道場を開いたので道場小路の名が起ったという。代々の子孫がこの道場を守って幕末に及んだ。

資料 昔から今にいたる 宮城県に関する名数（矢島玄亮・鈴木嘉美）

奥陽名数（「宮城県史」第32巻の内）

仙台郷土史夜話（三原良吉）

連坊小路物語（田村 昭）

名数みやぎ郷土小事典（菊地勝之助）

## 16. 仙台七夕の由来

問 仙台七夕の由来を、くわしく知りたい。

答 仙台七夕とは、現在新暦の8月6日から8日にかけて、主に中心部の商店街で盛大に催される竹飾り行事を指しています。「祭り風土記」（宮尾しげを）に『星祭り〔?〕の形式が変化してしまい、七夕祭の信仰は全く見当らず、竹飾りの形式だけを伝えているのが仙台の七夕祭である。』と記してある通りです。伊達政宗が、低湿な原野をきり開いて、仙台の城下町を造成したのが17世紀の初頭でした。そこで行われてきた七夕祭は、全国どこにでもあったような素朴な、それでいて深い意味をもつ伝統的な民俗行事で、決して仙台特有のものではありませんでした。今日見られるようなスタイルの竹飾りも仙台で発生したものではなく、仙台北下町創設から約100年後の元禄頃、江戸文化が生み出し江戸町々で行われていた江戸風のを移入して現代に至ったものであります。

「江戸時代」（北島正元）にも、『いまのように笹に五色の短冊をつけ、これに歌や願いごとを書く習俗は元禄時代にはじまったものである。』とあります。この竹飾のニューモードは、地方各地に逸速く伝播し、在来の伝統的な七夕祭に際立った生彩を添えるものとなりました。しかし、明治以後は、急激な時代の奔流のまにまに、その多くは次第に廃絶して行きました。そのような中において、仙台では肝心の信仰面の空洞化は如何ともなし得なかったものの、なおその形式を存続しつつ、しかも観光資源の最たるものに組み込みデラックスな「仙台七夕」として、期間中2・3百万人の見物大衆を誘引するものとなったのです。

本来、日本の七夕祭は、瑞穂国の日本民族とともに、古い時代から、農を主体とした人間生活に密着しながら、複雑な合成過程を経てきたものです。「七夕」という外来の中国語を、「たなばた」と日本語読みしていることが、如何に古くから「たなばた」の本体があったかを明示しています。「たなばた」という日本古来の民俗信仰を母体とし、その中から盆行事の部分が仏教によって抽出包摂し去られ、更に中国伝来の乞巧奠〔きこうてん〕という星祭が合体し、ミックスされたのです。わが国の歴史の上で、外国文化というものが、変形されずに受容されたものは、殆どありません。七夕もその一例です。

わが国では、毎年2回、年の始めと7月の満月になる日、すなわち旧暦の正月と7月の15日は、祖霊を祀る最高潮の日とされてきました。正月の七草の日と、7月7日とは15日の祖霊の大祭の準備に入る斉日〔いわいび〕でした。旧暦の7月7日頃は、丁度稲が開花期に入るとともに、風水害や病虫害の襲いかかってくる季節でした。出来秋の豊作を祈るには、唯一筋に神々にすがる以外にたてはなかったのです。田の神は、万能の祖霊の変化したものであると信じていました。7日の早朝、人々は楔〔みそぎ〕をして心身を清め、祖霊を祭るお盆の行事に入ったのでした。これが、農耕文化とともに始まった七夕の起原です。日を定めて帰って来る祖霊（神）に、海山の幸〔さち〕を供え、新しく織った御衣を捧げました。この御衣は、選ばれた乙女「棚機女」〔たなばたつめ〕たちが、沼や川や海の清らかなほとりに特設した機家〔はたや〕の「棚機」〔たなばた〕で、その日のために、心をこめて織り上げたものでした。「たなばた」の語は、この「棚機女」・「棚機」<sup>(1)</sup>から生じたものであります。神話にあらわれる機織りの場面をはじめ、各地に残っている機織沼や機織淵の伝説は、七夕信仰の名残をとどめているものです。〔宮城県内でも、鳴子の瀉沼・宮沢の化女沼・鶯沢の豊後沼・錦織の機織沼・北方の長沼などの織女伝説。〕今、葉竹にさげる紙衣も、女子の針仕事の上達を願う意味だけでなく、神に捧げる御衣の意味をもつものです。

七夕に引つづく祖霊の祭は、今では七夕から分離して、全くの仏教行事化してしまったのは、いうなれば仏教による民間信仰の部分的接収であります。元来個人の精神的解脱〔げだつ〕のための仏教と、靈魂や黄泉〔よみ〕の国の存在を信ずる民俗信仰とは、互いに相容れるものではなかったのです。だからこそ、仏教が混淆仏教となり、葬式仏教と化し、祖霊の祭を主管するものへと変形しなければ、末端大衆に滲透することができなかったのです。こうして、お盆行事の祭の部分も、

巧妙に仏教の担当する行事となってしまったのであります。

七夕に混入した外来の要素「星祭」または「乞巧奠」について、太古、中国の漢水のほとりに、織女という機織の巧みな美女がいました。父王は、この娘に、農耕熱心な牽牛という青年を婿に迎えてやったのです。ところが織女は機織を怠るようになったので、怒った父王は、牽牛を漢水の対岸に追放してしまいました。そして、年に一度、旧暦7月7日の夕だけ、逢いに来ることを許しました。その日が来ると、牽牛は漢水を渡って織女に逢いにいきました。その時には、鵲〔かささぎ〕が群がり集まってきて、牽牛の橋渡しをやったということです。この地上のロマンスが、天空高く流れる天漢〔あまのがわ。銀河〕のほとりの、琴座のヴェーガ〔Vega。織女座〕と、鷲座のアルタイル〔Altair。牽牛座〕に移して考えられるようになりました。中国古典の一つ、「詩経」の大東章に『維天有漢〔あまのがわ〕……織女……牽牛……』と、既に擬人化されたこれら二星のことが現われています。二星が視覚的に最も接近する陰暦7月7日の夜、この二星を祭って、芸芸の上達を願う中国の行事が乞巧奠といわれるものです。乞巧奠が、中国からわが国に伝来したのは、奈良時代の頃でした。「公事根源」〔くじこんげん〕によれば、孝謙天皇の天平勝宝7年〔755〕初めて乞巧奠を行ったとあります。<sup>(3)</sup> 勿論、最初は宮廷行事で清涼殿〔せいりょうでん・せいろうでん〕の東庭で行われました。梶〔かじ〕の葉に金の針を7本通し、また別に七つの孔をあけて五色の糸をより合わせてそれに通し、庭に椅子を置いて和琴を立てかけ、天皇が「二星会合」をご覧になり公卿に宴を賜ったのが始めの形であると伝えられます。それが、次第に、日本古来の七夕信仰に加味され、複合されて行くのです。

七夕祭は、江戸時代に入って五節句の一つとされてから、全国的に一層盛んに行われるようになりました。竹飾りも現われ出し、始めは五色の願いの糸を垂らすだけだったのが、元禄頃から短冊をさげ、吹流しをつけるようになってきました。葉竹は稲とともに本来熱帯植物だったところに意味があり、正月の門松と同じく、神の降臨のよりどころを示すものです。短冊は四手〔しで。神事のしめなわに垂れ下げる紙〕の変化したものとされます。この江戸風の七夕をとり入れた仙台では、七夕祭のことを「たなばたさん」といいました。第6代伊達宗村の時から、1日繰上げ旧暦7月6日の宵に行くことになりました。「仙台年中行事大意」(二世十遍舎一九)に『七月七日。棚機祭。六日夜より、篠竹に式紙短冊くさぐさの形を切て、歌をかき、又は、てうちんをともし、七日の朝、評定川または支倉川、澁川へ流す。』と記されています。6日の夕方から、笹竹をかざり姫星と彦星を祭って、手習・手芸の上達を願い、また関東・北陸・東北一帯で行われていたように線香をとばすところもあり、農家では田の神の乗馬として七夕馬(藁馬)を作って屋根に上げるなどして、豊作を祖霊に祈りました。7日朝、仙台では広瀬川に笹を流して、水を浴び、洗い物をしました。この日を七日浴〔なぬかび〕とも七日盆ともいい、本来は「みそぎ」をして盆祭に入る準備をする日だったのです。

このような七夕祭も、維新の変革とともに、全国的に衰微する一方でした。特に、明治6年の新

曆採用を境に、年々行われなくなり、竹飾り発祥の地東京でも、明治中期には殆ど見られなくなりました。「東京歳時記七月」（「風俗画報」第7号、明治22年8月10日号の内）に『七夕は面影も止めず……それに引替へて維新前は七日棚機の夜は市井至る所葉竹を樹ててこれに「一年を中に隔てておひ見まく星の契りや思ひつきせぬ」といへる歌をはじめ……色紙短冊等……』。また「断腸亭日記」巻之2（永井荷風）の大正7年〔1918〕7月6日の記事に『電車にて赤坂を過ぐ。妓窩〔ぎか〕林家の屋上に七夕の笹竹立てられ願の糸の風になびけるを見たり。旧年の風習今は唯妓窩に残るのみ。天下若し妓なかりせば、服左袒〔袒<sup>たん</sup>〕。言侏離たらん歎。呵呵。』と嘆いています。仙台でも、「仙台昔語電狸翁夜話」（伊藤清次郎）に、大正末期の七夕祭を、幕末当時のものと比較して『往時のそれに比較する時は到底及ぶところではない。』と記しています。また荷風の所見と同じく、「仙台繁昌記」（富田廣重。大正5年刊）に『肴町や常盤丁の遊廓では思ひ思ひの意匠を凝らして人目を惹き……』とあります。今では仙台の竹飾りの欠くべからざる最大の目玉ともなっている薬玉〔くすだま〕も、昭和10年頃実は花街の人々の工夫によって出現したものであることも、特筆に価するものであります。七夕の竹飾りが棄て去られることなく、特殊な環境の中で守りつがれてきたことは、軽々に看過すべき現象ではなく、その底に重要な意味を秘めているものがあります。忍従の生活を強いられる彼女等の出身地は、いずれも貧窮に痛めつけられた農村であり、さればこそふるさとへの切実でひたむきな祈りをこめて、来る年も来る年も竹飾りを作りつづけてきているのです。純粋な七夕祭の精神が、そこにこそ脈々と保持されてきたことを汲み取ることができるのであります。

旧物が一掃されたとき、人心は過去を顧みることをしないで、未来を夢見るものです。しかし、やがてその反動期が来て、再び古いものへの郷愁に目ざめるが、その時復活するものは、もとの姿ではあり得ないのです。行事の復活もその通りで、一旦抹消された精神を取り戻すよすがはなく、企業が大衆動員をはかるための、商業化の形態をとるものが多いようです。仙台の七夕も、その例にもれません。昭和2年、大町五丁目の商店界が七夕復興を提唱しました。そして、翌3年東北産業博覧会が開催された気運に乗って、仙台協賛会（仙台観光協会の前身）・商工会議所と商店街を糾合し、元来旧曆行事だったのを新曆日付の月遅れ、すなわち民俗学上中曆と呼ばれる8月6日を期して今日見られるような七夕祭が始められました。主催団体は、これを仙台七夕の第1回と数えています。この行事は年々盛大となり、昭和7年の第5回の人出は、15万人〔当時の仙台市人口203,383人〕と記録されたものがあります。戦中戦後の中断期〔昭和17～20年〕を経て、昭和21年には終戦和平を待ちかねたかのように、あり合わせの乏しい紙で工夫をこらした七夕飾りが、漸くバラックの建ち始めた仙台の町並を色どり、人々の傷心にさまざまな反応をもたらしました。翌22年8月5日戦災の傷痕いまだなまなましい中に、天皇・皇后両陛下を迎えたのを機会に仙台七夕は本腰を入れて復活されました。その翌年には七夕協賛会が生れ、今日のような豪華絢爛たるショー七夕が推進されることになったものです。ちなみに、神奈川県平塚市の商店街が、昭和26年以

来、新暦でショ一七夕を始めました。デラックスなこと全国一といわれています。

新しいショ一七夕に、伝統的箔付けをしたいと望むのは、人情の常であるかも知れません。そのため、いたずらに古きを貴ぶ余り、荒唐無稽な仙台七夕七百年説さえあります。また、藩政時代に、七夕祭が絶えることなく行われて来たのは、藩の手厚い保護で栄えた仙台商人が、この民俗行事を、商業主義と結びつけたためであるとする説もあります。しかし、注意すべきことは、華やかなショ一七夕のイメージをそのままに、豊かさの現代感覚のみで、かつての、全戸的な年中行事として素朴な民俗信仰の息づいていた時代のことを、安易に理解できるものでないということです。そこにあったものは、「三年一作」「十年三作」といいならされ、きびしい自然条件のもとに、二年に一度、三年に一度凶作が常習的に必ずくり返され、時には30万人の大量餓死をどうしようもなかったような、苦難と歎きを背負った、宿命的な大衆の生活でした。自然の猛威は農民を直撃するに止まらず、米経済に依存する町人から武家特権階級に至るまで、甚大な影響なしに済ませられるような生易しいものではありませんでした。天災を最大限に撓ねのけることのできる農業の技術革新や品種改良は、極めて最近の事実過ぎません。さればこそ、領内を挙げて、ひたすら神に祈り、祖霊にすがる以外に、何の救いがあったでしょうか。紙というものが非常に貴重で、反古紙〔ほごがみ〕すら容易に手にすることのできる時代ではありませんでした。そのような状況の中でどのようにかして入手した短冊1枚にこそ、庶民の絶大な悲願がこめられ、来る年も来る年も、神（祖霊）に捧げる祭は絶やすことができなかったのです。「日本の生活文化財」（祝 宮静編）に『七夕の恋物語を隣国から借りて来たばかりに、いささかわけのわからぬ話になってしまったが…今は正月行事とか盆行事と称して〈まつり〉とはいわないようになったが、昔はいずれも〈まつり〉としての形式をそなえていた。……正しい〈まつり〉の精神を生産の原理とし生活の指針としてきた、つつしみ深い人々の心が、不敵な方向に曲がりはじめたのは、みずから生産せず他人の生産したものを売るだけで利を得た〈あきない〉商業が盛んになってからで、その飽くなき営利主義は、古い信仰と、それによって支えられた道徳をふみにじり、誤まれる自由主義と科学主義とは無神論を助長し、清く美しき“心音の世界”は四分五裂、まさに寸断されようとしているのである。』と警告しています。昭和30年以来、仙台では、全市一戸一本の伝統七夕飾りの復活が叫ばれてきましたが、どうしても実りません。それを活着させる敬虔な要素が、今は失われてしまったからです。殊にも、全般的な経済の高度成長に伴い、米の生産事情も一変し、止めどなく休耕・転作や余剰米の問題が論議されるに至った昨今、七夕祭の本質も、忘却の彼方に遠のく一方なのであります。

注(1) 機〔はた。織物を織る手動の機械〕の構造に棚があるからいう。

注(2) 五経と総称される易经（周易）・詩経（毛詩）・書経（尚経）・春秋・礼記の一、孔子の編といわれる。殷の世から春秋時代までの詩5千余編から選び抜いた311編〔内6編は詞がない〕を、国風〔各地の国ぶり〕・雅〔宮廷の雅楽〕・頌〔宗廟の祭詞〕の3部門に大別したもの。詩を知識人必習の教養として尊重し、經典化されたもの。別名を毛詩というの

は、毛享・毛萇が伝えたからいう。

注(3) 有職〔ゆうそく〕の書。応永2年〔1422〕一条兼良〔かねなが・かねよし〕の著、1巻。正月から12月までの宮中の公事・儀式の根源・沿革を記してある。

注(4) 人日〔じんじつ〕・上巳〔じょうし〕・端午〔たんど〕・七夕〔しちせき〕・重陽〔ちょうよう〕の節日の総称。人日は陰暦正月7日。七種〔ななくさ〕粥を祝う。ななくさ・人の日ともいう。上巳は陰暦3月の初の日〔み〕の日、後に3月3日。宮中では、この日曲水〔きょくすい〕・ごくすい〕の宴を張った。桃の節句・雛の節句・重三〔ちょうさん〕・じょうみともいう。端午は陰暦5月5日の節句。古来上巳〔3月3日〕を女子の節句とするに対し、これを男子の節句とした。菖蒲や蓬を軒に挿し、粽〔ちまき〕や柏餅を食べる。近世以降武士になって甲冑・武者人形などを飾り、庭前に幟旗や鯉幟を立てて男子の成長を祝う。戦後はこの日を「子供の日」として国民の祝日とされた。あやめの節句・重五〔ちょうご〕・端陽ともいう。七夕は旧暦7月7日の節句。たなばた。重陽〔陽数の九を重ねる意〕陰暦9月9日で、菊花の宴など行われた。重九〔ちょうきゅう〕ともいう。

注(5) 幼名勝千代丸、総次郎と称した。伊達吉村の第4子で、吉村が致仕した寛保3年〔1743〕その跡を継いで第6代当主となった。襲封当時は、府庫に3万両にのぼる剰余金が残されており、歴代のうちで最も財政的に恵まれた藩主といわれた。しかし、滔々と華美に流れる風潮に加えて、凶作・洪水・城下町大火など頻発し、領内は疲弊の一路をたどって行った。宝暦6年〔1756〕5月24日歿、39歳。大年寺に葬る。政徳院殿忠山浄信大居士と法諱す。

注(6) 原本は斎藤報恩会「常盤文庫」に所蔵されている。「本食い蟲五拾年」(常盤雄五郎)にこの書のことを次のように記してある。『この『仙台年中行事大意』は、元来二世十返舎一九著の『奥羽一覽道中膝栗毛』第四篇卷之下〔嘉永2年刊〕に載せられたもので、その記述は恠に真率で我が仙台の昔の年中行事を記して余蘊なく、外には見るを得ざる好文献である。私は古くこの年中行事の部分の写本を蔵していた。次いで原刻本を求め得たので悦びの余り、先年『仙台年中行事絵巻』を複製したときに〔昭和15年7月〕、三原良吉氏の応援をもとめて、其の解説中に校訂本を附載して置いた。ところが昨今諸方より、例えば仙台七夕の行事は如何なものであったか、というような照会が舞込んで来る。そこで一応は『年中行事大意』という本にあると回答する始末なので、畢竟この本のあることが知られて居ないのに原因することと思ひ、その全文を此処に附載した訳である。又一面には、この位のことは仙台の人々に常識として知っていて貰いたいという気持が手伝ったからでもあった。』

二世十返舎一九は、江戸末期下野国花輪に生れ、戯作者〔げさくしゃ。俗文学の作者〕を志し江戸の二世楚満人の門に入り、後に十返舎一九に就いて修業した。初め十字舎三九と

号したが、師の十返舎一九の歿後、二世一九と称した。本名糸井鳳助また鳳作と伝えられる。江戸大伝馬町に住んだ。嘉永2年頃東北を旅行して「奥羽一覽道中膝栗毛」を著わした。

資料 先祖の話（柳田国男）

日本の祭（柳田国男）

歳時習俗語彙（柳田国男）

仙台の七夕祭と盆祭（三原良吉）

仙台市史第6巻

仙台の年中行事（仙台観光協会）

仙台昔語電狸翁夜話（伊藤清次郎）

わしが国さ第24、36号（仙台協賛会）

本食い蟲五拾年（常盤雄五郎）

仙台年中行事大意（二世十返舎一九。「本食い蟲五拾年」、 「年中行事絵巻解説」の内）

## 17. 工兵隊が架橋した旧仲ノ瀬橋

問 仲ノ瀬橋は、工兵隊によってはじめて本格的な橋となったのだと聞きましたが、それはいつ、どのようにして架けられましたか。

答 広瀬川のこの地点は、川の真中に瀬が露出しており、流れが二分されていました。仲ノ瀬という名はこれから起りました。今は大工町側は干上って、川原が川幅の半分以上を占め、しかも近年護岸盛土されて河川敷公園となり、流れは左岸沿いの一本だけとなっています。仙台開府時より約6、70年後に始めて架橋されたもののようで、川内大工町に通ずるので大工橋といい「延宝6～8〔1678～1680〕年間製作仙台北城下大絵図」に支倉橋・評定所橋とともに初見されます。やがて、元禄7年〔1694〕10月3日、大工橋を中瀬橋と改めた記録があります。中瀬橋は、中ノ瀬を中継地として、両側に架けた長短2橋から成っていました。左岸寄りの長い方は、長35間幅2間で、その内17間は板敷橋で橋脚は1丈5、6尺の石積となっており、残りの部分は18間の土橋で、板敷橋と土橋とを継ぎ合わせたものでした。右岸寄り短い方は、長15間幅2間の土橋でした。明治時代に土橋の部分は全部木橋に改修されました。

昭和3年〔1928〕4月15日から6月8日まで、仙台商工会議所主催で、東北産業博覧会が仙台で開催されました。その設営工事が、その前年から着手されましたが、第1会場（川内の旧制二中の